

BLIZZARD
ENTERTAINMENT

OVERWATCH
X
YOASOBI

地に堕ちた雀



E. C. MYERS 著

ストーリー

E. C. MYERS

イラスト

MANDA SCHANK

編集

CHLOE FRABONI

デザイン

SOPHIE ERB

クリエイティブ・コンサルタント

JEFF CHAMBERLAIN, MIRANDA MOYER, NESSKAIN, DION ROGERS

プロダクション

BRIANNE MESSINA, CARLOS GARCIA RENTA,
TAKAYUKI SHIMBO, JT TORREA

スペシャルサンクス

AIMEE DENNETT, TOSHIYUKI (TONY) IWASE, KAI KAMATA,
WATARU NINOMIYA, COREY PETERSCHMIDT, VALERIE STONE,
MIYU TORIMITSU, SHUYA YAMAMOTO, ASAMI YOSHINO



Blizzard.com

© 2026 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardおよびBlizzard Entertainmentのロゴは、米国およびその他の国における Blizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

このストーリーはフィクションです。本作品に登場する名前、キャラクター、場所、出来事は、著者または作画者の想像による産物または架空のものであり、実在する人物（存命中または故人）、出来事、団体、場所に類似するいかなる描写も、風刺的な意図はなく、偶然によるものです。

Blizzard Entertainmentは著者や第三者のウェブサイトもしくはそのコンテンツを管理しておらず、またそれらについて一切の責任を負いません。

「オーバーウォッチ」 これまでの物語

数百年間にわたって、シマダ流ニンジャ衆は日本の一角、すなわちハナムラ、カネザカ、ハナオカの各地を治め、守ってきた。シマダは法よりも力を是とする集団ではあったが、対抗組織である橋元組（以下ハシモト組）から地元の人々を保護した。なぜなら、ハシモト組は暴力を背景にした苛烈な支配によってしのぎを得ていたからだ。しかし、頭領の島田宗次郎が暗殺されたことで、シマダ一族は大混乱に陥る。宗次郎の長男である島田半蔵（以下ハンゾー）がすぐに跡を継いだが、長老衆に侮られ、彼らの専横を許した。ハンゾーは意思決定の場から遠ざけられ、組織はシマダ一族の力を元に危険な生業に手を染めていった。そして恐喝や暗殺といった強引な手段を使って勢力拡大を進めた結果、世界の平和維持に携わるオーバーウォッチに目をつけられることとなった。

宗次郎にはもう一人の息子がおり、名を島田源氏（以下ゲンジ）といった。ゲンジはかねてより勝手気ままに暮らしていたが、緊張が高まる中、長老たちはいよいよこれを許しておけず、兄であるハンゾーに解決を迫った。二人の対峙は決闘へと発展。敗れたゲンジは命を落としたものと考えられた。しかし、ゲンジはオーバーウォッチに救助されており、改造手術によって一命を取り留めていた。一族の犯罪帝国を終わらせるため、オーバーウォッチの一員となったゲンジがハナムラに戻ってきた時、そこにハンゾーの姿

はずではなかった。弟を手にかけてと思ひ込み心に深い傷を負ったハンゾーは、一族のすべてを捨て去り流浪の身となっていたのだ。

シマダ兄弟が去った町では、ハシモト組が勢力を拡大していた。比類なき刀鍛冶である山神敏郎を捕らえ、かつてシマダ一族のために作り上げた特別な武器をハシモト組のために作るよう強いたほか、敏郎の妻でありシマダの剣術師範を務めていた山神朝には、市民をハシモト組に従わせるように要求した。応じなければ「強引な手段をもって騒乱の芽を摘むことになる」と脅した上でのことだ。しかし、二人には霧子(以下キリコ)という娘がいた。シマダ城で幼年期を過ごしたキリコはゲンジとハンゾーの知己であり、成長してからは地下組織「ヨーカイ」に加わってハシモト組への抵抗を続けていた。

10年以上の時を経て、ゲンジとハンゾーはついに再会を果たした。弟が生き延びていたことを知ったハンゾーは、自らの過去を振り返り、自分自身に問いかけた。後悔にまみれた過去を経て、未来のために己のなすべきことは何か？ 東京へ戻った折、キリコと偶然再会したことで、ハンゾーはヌルセクターによる被害とハシモト組の非道に苦しむ人々のために力を振るうことを決意する。一方、オーバーウォッチに復帰したゲンジを待ち構えていたのは、ヴェンデッタ率いる新生タロンがもたらす新たな脅威。さらにハシモト組がますます勢力を強めたことを受け、ゲンジもまた単身東京へと帰還する。ハシモト組とタロン、その関係を突き止めるために――

地に堕ちた雀

「人とは土地という器に宿る心である」とはゲンジの父、島田宗次郎の言葉だ。金さえ払えば人は動く。どれだけ愚かな主でも、民を戦いに駆り出すことはできる。しかし、そこに住む者たちの心をつかめば、故郷という拠り所を守るために力の限り手を貸してくれるだろう――

がらんとした渋谷の街角が今の東京を物語っていた。

「眠らない街」とうたわれた日本の首都。かつての活気も今は遠く、原宿へと抜ける通りは冥々として人の気配がない。ヌルセクターの撤退から数ヶ月を経てなお復興は遅々として進んでおらず、ハシモト組の支配の下で以前の街並みの戻る日が来るのか、ゲンジは危ぶまずにはいられなかった。あのならず者たちは混乱に乗じて東京全土に支配の手を伸ばし、市民は息をひそめるように暮らしている。

ハシモト組に関する最新の情報を目にしたゲンジは、命令を無視してこの地に帰ってきていた。報告によると、ゲンジの「竜一文字」に似た刀を帯びた構成員が目撃されている。つまり、シマダ一族直属の刀鍛冶、山神敏郎の打った特別な武器の可能性があるということだ。もしもそれが事実なら、ヌルセクター侵攻の爪痕が色濃く残るこの街は、今も大きな脅威に晒されているということであり、復興が遅れるのも当然と言えるかもしれない。はたしてこのハシモト組の躍進は独力で成し遂げられたものか、それともタロン

が裏で糸を引いているのだろうか？

ゲンジは立ち並ぶ建物の上に立ち、闇に蠢く奸賊の姿を探した。眼下に目立つ動きは見受けられない。ハシモト組の詰め所がどこかにあるはずだが――

(……あれか)

明滅する街灯とネオンサイン、ついたままのホログラム広告の光を受けて茫々と浮かぶ鬼の面。夜と同じ色をしたスーツに身を包んだ者たちが通りの一角にたむろしていた。

人を待っているのか、それとも指示を待っているのか。

逸る指先を抑えながらゲンジはしばらく様子を見る。

(動く気配がない。突いてやらないとダメか)

相手は六人。速やかに制圧し、一人だけ逃がしてやればアジトまで“案内”してくれるかもしれない。

サイボーグ手術によって改造、強化された手足のサーボ機構が、主の戦意を受けてひとりでに動き出す。屋上の端から一歩踏み出すゲンジ。建物から建物へと飛び移りながら、六人の立ち位置を正確に把握し、最も効率的に無力化する手順を考える。

黒服たちの背後に音もなく降り立ち、いざ実行に移そうとした瞬間、一人が偶然振り向いた。

「だ、誰だ!？」

男はうろたえながらもホルスターから銃を抜く。

ゲンジは地を蹴り、素早く手裏剣を放った。

男が倒れると同時に街灯が割れて消える。銃声。奇襲を受け、明かりを奪われた状況で闇雲に撃った弾が当たるはずもなく、跳弾音だけが街頭に響く。赤い鬼の仮面をかぶった二人の男が前に出た。

発砲しながら迫ろうとする赤鬼たち。ゲンジはとんぼ返りでその頭上を飛び越え、闇に潜んだ。

「なんだこいつ!？」

「どこ行きやがった!？」

闇を縫って飛来する二枚の手裏剣。ハシモト組の二人は声もなく倒れ伏した。

彼らの頭上、石造りの建物の壁に片手で張り付いていたゲンジが、銀色の面を着けた女の前に降り立った。女はすかさず発砲するが、弾丸は脇差に弾かれて届かない。そこに青銅の鬼面と白の鬼面の構成員二人が銃を振りかざして襲いかかった。

横飛びに攻撃をかわすゲンジ。青銅面の銃を真っ二つに斬り、跳び蹴りを食らわせると、そのまま上空に蹴り上がって身をひるがえし、回転しながらもう一人に斬撃を浴びせかけた。そして路上に倒れた男たちを背に、残された銀面の女に振り返る。

この女には逃げ帰ってもらい、ハシモト組の幹部の元まで案内してもらわなければならない。そのためには――

瞬間、閃光が走った。

上空から雷鳴のような光線が襲いかかる。ゲンジはとっさにかわしたが、女は反応できずに直撃を受けて仰向けに倒れ伏した。一瞬で焼け焦げた衣服からかすかな煙が上がる。

(今のは一体……?)

攻撃の飛んできた方向を見上げると、精巧な黄金の鬼面を着けた大柄な男がゲンジを見下ろしていた。革のロングコートを着込み、ライフルではなく刀を抜いている。背後で地面に伸びているような下っ端ではないことは明らかだ。

(探す手間が省けたな)

その出で立ちからして、この一帯の仕切り役といったところだろう。少なくともそれだけの威圧感はある。

ソジョーンはゲンジが東京に向かうことに反対していた。ハシモト組との交戦など言うまでもなく止められているが、敵の幹部クラスが直接姿を現したのだ。ただ様子を探るだけでは得られない情報が手に入るかもしれない。捕らえれば口うるさいコマンドーも文句を言えないだろうし、地元の当局も身柄を抑えがっているはずだ。

ゲンジがそんな打算を働かせた刹那、黄金面の男が刀を振るい、ビーム状のエネルギー波を放ってきた。かろうじて回避する。一瞬前まで立っていた地面が大きくえぐれていた。

パチパチ弾けながら敵の刃を覆う不安定なエネルギーは、ゲンジの持つ「竜一文字」のそれと似ていた。そのような力を帯びた刀を打てる者は山神敏郎において他にない。

(情報は……正しかったか)

シマダが瓦解して以来、敏郎は行方不明となっていた。もしハシモト組が彼を、その類い希なる技を手に入れていたのなら、これほど迅速に東京を掌握できたことにも説明がつく。ただし、敏郎の刀は強力だが、使いこなすには特殊な訓練を必要とする。火花を散らして安定しない敵の刀は、使い手が未熟だという証だ。

またも閃光。転がって回避するゲンジのアーマーを塵と砕けたセメントが叩く。立ち上がりざま、黄金面の男に手裏剣を放つ。しかし、相手は現れた時と同じように素早く姿を消した。

(逃がすものか――)

ゲンジは近くの建物を素早くよじ登り、屋根の上に立った。逃げる敵の姿を探して見渡せば、ロングコートをはためかせて遠くの低い屋根に飛び移る人影が見えた。

ゲンジは屋根伝いに疾駆する。眼下を逃げる男を見失うわけにはいかない。原宿の

区画は不規則で、碁盤の目のように整理されてはいない。建物を縫うように伸びる曲がりくねった道、大通りから枝分かれする数々の路地、いくつもの袋小路……この街はまるで迷路だ。

若かりし頃、ゲンジはここから逃げ出すことばかり考えていた。父親の期待から、一族が手を染めている後ろ暗い稼業から、家族を捨てた母の残した空虚から、どこか遠くへと逃げたかった。そしてついに一族の檻から解き放たれたはずだったのに、今もなおゲンジは昔と同じ迷路をさまよっている。

この街は結局変わらないままなのだ。それでも、ゲンジは身も心もあの頃とは違う。

逃げる敵をひたすらに追う。距離を詰めると飛んでくるエネルギーの爆風をかわし、見失った相手の痕跡を再び探す。追う者と追われる者、これではどちらが鬼かわからない。

やがて運命の女神はハシモト組の男に味方をしたようだ。敵の攻撃がそれで足元の屋根に当たり、ゲンジは数階建ての高さから歩道へと転げ落ちた。

アーマーのおかげで落下の衝撃は幾分和らいたが、それでも全身に痛みが走る。

歯を食いしばって立ち上がるゲンジ。これまでの修羅場に比べれば、このくらいどうということはない。周囲を見渡すと、標的が荒れ果てた建物の入り口をくぐろうとするのが見えた。屋内の暗がりへと消える男を追って、ゲンジは追跡を再開した。

出入り口の上で点滅する壊れたネオンサイン。ゲンジはほくそ笑んだ。どうやら女神は微笑む相手を変えたようだ。

(ここは俺の縄張りだ)

足を踏み入れたのはゲームセンターの廃墟。父が権勢を振るっていた頃、ゲンジがいつも入り浸っていた場所だ。店が潰れたのは最近のことなのか、それとも昔のことなのかはわからないが、内部の構造は記憶に残っている。地の利はこちらにあるというわけだ。

闇の中、壊れたゲームの筐体が立ち並ぶフロアをゆっくりと、足音を殺して進む。瞬時に動けるように身をかがめ、どんな物音も聞き逃すまいと耳をすませながら。

突然、周囲の筐体の画面が一斉に光った。

「ザ・ストーム・イズ・カミング！」

「ファイト！」

「レディ？ スリー、ツー、ワン、ゴー！」

ついに一族の檻から解き放たれたはずなのに、
今もなおゲンジは昔と同じ迷路をさまよっている。
この街は結局変わらないままなのだ。それでも、ゲ
ンジは身も心もあの頃とは違う。

アーケードマシンの明るい画面に表示されたドット絵のキャラクター。若きゲンジの指がボタンを叩き、コマンドを入力する——大パンチ、大パンチ、小パンチ、小パンチ、小キック、大キック。『ファイターズ・オブ・ザ・ストーム』におけるゲンジの持ちキャラ「ストーン」の体力ゲージは半分、対して相手の「スロール」の体力はもうわずかだ。この最終ラウンド、しくじりさえしなければハイスコアに手が届く。

その時、大きな影が画面を覆った。ゲンジは振り向かなかった。見る必要などない。シマダの御曹司に向かってこんな風に近づいてくるのは一人だけだ。

(ゲームオーバー、か)

ハンゾーの接近に気を取られたのはほんの一瞬だったが、集中を切らしたゲンジのキャラが逆転負けを喫するのに十分な隙だった。

傷だらけになったストーンの顔の上で「Continue?」の文字が点滅し、「どんな不運も、我らならば乗り越えられる」というセリフが入力を促してくる。

「何をしている？」

「見ての通りだよ。あーあ、もうちょっとでスコア更新だったのに」

ゲンジはそう言って、ランキングに並ぶ自分のイニシャルを新たに一つ追加する。

「そんなことはどうでもいい」

ハンゾーがアーケードマシンの上に何かを乗せた。それは一人の少女——くすくすと笑いながら、筐体の上で足をぶらつかせている。

「キリコ!」

ゲームに夢中になっていたせいで、ゲンジはキリコのことをすっかり忘れていた。子守などという柄ではないにもかかわらず、カネザカに遊びに行く際はたまにこの少女がついてくるのだ。

「やーい、負けたー!」

「外にいたぞ。一人でな」

ゲンジは溜息をついた。

「あんまり離れるなって言ったのに——」

「違う。悪いのはキリコじゃない」

遮るようなハンゾーの言葉。キリコ笑顔が曇った。

ゲンジはようやく兄の顔を見た。この頃からすでに、ハンゾーは長老衆と同じように振る舞うようになっていた。ひげを伸ばし始めたのも威厳をつけようと思っただろう。

しかし、ゲンジはそんなに早く大人になるつもりはなかった。誰に何を言われたとしてもだ。

「大げさだろ、兄者。キリコは大丈夫だよ。な、キリコ？」

キリコにウインクしてみせるゲンジ。ハンゾーは苛立たしげに目を細めた。

「今回はな。拙者がいたからだろう」

「ちびっこニンジャに手を出す奴なんていないって。なあ？」

ゲンジがキリコの顔を見る。少女は何も言わず、目を伏せて膝を抱えているだけだ。

ハンゾーがアーケードマシンを拳で叩いた。

「真面目な話をしている！くだらない遊びにキリコを連れ回しているのは貴様だ。保護者としての責任を自覚しろ。キリコがかどわかされたり怪我でもしたら、どの顔を下げて先生に申し開きをするつもりだ？」

ハンゾーは心からキリコの心配をしているのかもしれない。だが、彼という人間が周囲に与える印象を本人はわかっていないのだ。ゲンジの目に映るハンゾーは、いつも厄介事に巻き込まれる心配ばかりしている。そのような態度が長老衆からの評価を損ない、立場を危くしていることも——父からどんな目で見られているのかも知らずに。

とうとうキリコが泣き始めた。

それがあたかも自分の正しさを証明しているかのように、ハンゾーは一言「見ろ」と言い捨てた。

ゲンジはキリコを抱き上げ、腕に抱えてやる。そして彼女にだけ聞こえるよう、耳元で「ごめんな」とささやいた。

「ケンカしちや……ヤダよう……」

嗚咽を漏らしながらあえぐようにキリコが言った。

「心配しなくていい、ちょっと意見が合わなかっただけだ。兄弟ってのはこういうもんなんだよ」

キリコの取り乱しようにゲンジは内心驚いていた。彼女の前で兄弟喧嘩をしたことは初めてではないし、おてんばで気の強い子だ。いつもならこの程度のことでうろたえはしない。

「ところで、どうやって俺たちを見つけたんだ？」

ゲンジに問いかけられたハンゾーは、カウンターをあごで示した。にらみつけるゲン

ジの視線から逃れるようにそっぽを向く店主。カネザカの人々はシマダ一族のためなら協力をいとわない。中には忠義を誓う者もいる。それが正しいことなのかどうか、ゲンジにはわからなかった。

言うまでもなく、ゲンジにもシマダの血は流れている。それでも人を脅したくはなかったし、何かを強制することを彼は好まない。その点、兄のほうはその手のことに長けていた。

「長老衆の“目”はあらゆる場所にあるのだ」

告げるハンゾーの声色には、先ほどまでの棘はない。

「それはそうと、父上が緊急会合のために招集をかけた。拙者がここに来たのはそれを伝えるためだ。また欠席などしたら困ったことになるぞ」

「それは俺の心配か？ それとも自分の？」

ハンゾーはただ「困ったことになる」とだけ繰り返した。

「俺がいなくても父上は気にしないよ」

「その分の期待を拙者が代わりに背負っているからな」

「兄者は……ちょっと気を張りすぎじゃないか？」

ハンゾーの瞳に剣呑な光が宿った。ゲンジは視線を外し、キリコを抱え直す。

「会合には出るよ、兄者」

「ようやくお前も——」

「こいつで俺に勝てたらな」

ゲンジは一步下がり、『ファイターズ・オブ・ザ・ストーム』の筐体を手振りで示す。ハンゾーはぶつぶつ言いながらも2P側の操作盤に向かい、ぎこちなくスティックとボタンに手を置いた。新たに対戦を開始するゲンジの使用キャラは今回も「ストーン」、このゲームにおけるニンジャのキャラクターだ。対する兄が選んだのは、やはりと言うべきか、筋骨隆々でいかにも強そうな「ガロッシュ・ヘルスクリーム」。

ゲンジを見ると、ハンゾーはわずかに口の端を上げてみせた。

「ビデオゲームでなら拙者に勝てると思ったか？」

夜になってゲンジ、ハンゾー、キリコがシマダ城に帰ってくると、城内にはすべての明かりが灯っていた。遠くから聞こえた父の怒鳴り声にゲンジが身震いする。何を言っているのかは聞き取れなかったが、怒っているのは明らかだ。

小声で悪態をついたハンゾーが走り出すと、ゲンジも急いでその後を追った。彼の腕の中で眠っていたキリコも目を覚まし、体をこわばらせながら不安そうにしている。

「キリコ!」

現れたのは山神朝だ。キリコはぱっと顔を輝かせ、ゲンジの腕から下りて母の元へと駆けていく。兄弟の師である朝は、通りすがろうとするハンゾーを立ち止まらせていた。

「どこに行っていたの?」

キリコの手を取りながら朝が言った。

「ハンゾー! ゲンジ!」

先ほどよりもはっきりと聞こえる父の声。ハンゾーは落ち着かない様子で身じろぎをする。

朝は気遣わしげな目で兄弟を見て、父親をこれ以上怒らせないようにと忠告すると、キリコを連れて道場へと歩いていった。

執務室では、まるで檻に閉じ込められた獣のように、宗次郎はせわしなく部屋の中を往復していた。ハンゾーとゲンジが現れると宗次郎は立ち止まり、安堵の表情を見せた——が、すぐに眉を吊り上げた。

また怒鳴られるかと身構えたゲンジの予想に反し、父の声は静かで、しかしそこには怒りを押し殺そうとする響きがあった。

「皆から言われたぞ。重要な会合だと言って人を集めておきながら、頭領の息子二人がいないのはどういうことかと。いい恥さらしだ……今回もな」

宗次郎が額に手を当てながら溜息をつく。

「申し訳ありません、父上」

頭を下げて謝罪の言葉を口にするハンゾーに対し、ゲンジは口をつぐんでいた。この状況を好転させるような言葉が自分の口から出てくるとは思えなかったからだ。ニンジャとして気配を消す術は心得ている。

「いい加減に立場をわきまえろ。連中はこう言いたいのだ……自分の子の手綱すら取れず、なめられてばかりいる男になぜ従わねばならん? 敵はおろか身内にも侮られて当主が務まるものか、とな」

ハンゾーは顔を上げることもせず、足元の畳をじっと見ていた。

ゲンジは兄を横目に、そんな殊勝な態度を取ってみせる気にはなれなかった。

「いつまで待ってもお前たちが来ないものだから、最悪の事態を危惧していた。万が一にも——」

年代物の書斎机に疲れた様子でもたれかかりながら、宗次郎はそこで言葉を止めた。脳裏に浮かんだのは、家族三人の心に刻まれた数年前の出来事。家族を捨てた妻につけられた傷が、今もなおじくじくと痛んだ。宗次郎の持つ激しい気性と怖れを和らげていたのが、穏やかな物腰と冷静な判断力を兼ね備えた島田留美子という女性だ。周囲に愛され、誰からも信と情を寄せられる心優しい人物だった。一族全体の利益よりも私腹を肥や

すことに余念がないシマダの長老衆を抑えるには、民の掌握がまず必要であり、そのため
に留美子の存在は大きかった。そんな彼女に見限られるという屈辱を受けた宗次郎は、
息子二人に対して厳しくあたるようになった——まるで力を誇示するかのように。

そう、それはまさしく“誇示”だった。シマダの頭領として君臨し、息子たちにならみを
利かせるために、すべて計算した上で力を見せつけていたのだ。

ハンゾーは父のやり方をよく学んだ。シマダ家の嫡子であることにこだわり、強く隙の
ない男であろうとした。そのために体面を気にするようになり、自身の思い描く理想を弟
にも押しつけようとした。

兄と父はゲンジを認めなかった。あるがままに振る舞い、一族のために自らを律しよ
うとしない未熟な軟弱者というわけだ。そして本人もまた、母のようにすべてを捨てる勇
気のない自分を弱い人間だと考えていた。

「誰のせいかわかっているな？」

宗二郎の言葉と視線が自分に向けられていることにゲンジは一瞬遅れて気がついた。
「スパロー……情弱なスズメよ。いつまで口を開けた雛のままでいるつもりだ？ 守ら
れていることがわからんか？ この俺が、貴様の兄が、身を削りながら果たしている責任
から守ってやっていることが！」

父の顔は真っ赤だった。

「それを貴様は務めも果たさず、我らの顔に泥を塗っていることがなぜわからん！」

ゲンジは殴られると思い身構えたが、ハンゾーが間に割って入った。

「此度の不始末、責めを負うべきは拙者です、父上」

深々と頭を下げるハンゾー。

「新しく鍛錬を始め、組手相手が必要でした。そのために城から離れ、鍛錬に熱中するあ
まり時を忘れておりました。面目次第ありません。このような過ちは二度と犯さぬと誓
います」

そのままゲンジをちらと見て続ける。

「もう二度と」

ゲンジは事のなりゆきに驚き、何かを言う勇気もなく項垂れるしかなかった。

「我ら二人、必ずやシマダの一分を立ててみせます」

ハンゾーの言葉を受けて威儀を正す宗次郎だが、視線は二人に向けられていても、そ
の目はどこか遠くを見ているようだった。そして一歩下がり、つまずいてよろめく。ハンゾ
ーが支えるために駆け寄るが、宗次郎はそれを払いのけた。

「貴様には失望したぞ」

そう吐き捨てると、背を向けて息子二人を下がらせた。

「スパロー……情弱なズメよ。いつまで口を開けた雛のままにいるつもりだ？ 守られていることがわからんか？ この俺が、貴様の兄が、身を削りながら果たしている責任から守ってやっていることが！」

父の顔は真っ赤だった。

「それを貴様は務めも果たさず、我らの顔に泥を塗っていることがなぜわからん！」

翌朝、夜明けとともに目覚めたゲンジの頭を一つの考えが支配していた。俺はここに
いるべきじゃない——この場所から離れられればどこでもよかった。衝動のままに城を
抜け出して振り返った時、ここはもう自分の帰る場所ではないと思った。ゲンジをそこま
で追い詰めたのは他ならぬ家族なのだから。

道場の前を通りかかると、こんな時間だというのに中から物音が聞こえてきた。近寄
り、障子越しに耳をすませる。何かを打つ音とハンゾーの猛る声——寝ずに鍛錬でもし
ているのだろうか？ 打ち込み人形にぶつけられる熱を帯びたその声は、誰に向けられた
ものかとゲンジはふと考えた。どこかの敵だろうか？ それとも父か？

(あるいは——俺か?)

少しは休めと言ってやろうとゲンジは戸に手をかけて、動きを止めた。そんなことをし
ても鍛錬に付き合わされるか、また口喧嘩になるだけだ。言い争いをしたい気分ではな
い……そんなものは昨日の一件で十分だ。

ゲンジは手を離し、きびすを返した。何歩か歩くと、束の間の静寂にあった道場からま
た鍛錬の音が聞こえてくる。心なしか、それは先ほどよりも強くなっていった。

これといって行くあてもなかったゲンジの足は、いつものようにカネザカへと向い
ていた。行きつけの猫カフェで朝食でもとろう。それに、友人たちとも会えるかもしれな
い——

不意にその足が止まった。誰かに後をつけられている。

背後から聞こえる足音は軽い。つまり相手は小柄で、目標の歩調に合わせて足音を消
す技術を身につけていないということだ。尾行に慣れていないのか、そもそもするつもり
がないのか。

ゲンジが振り返ると、そこにはキリコがいた。背筋をぴんと伸ばし、ゲンジの目を見な
がら堂々と近づいてくる。幼くともキリコはニンジャだ。その気になれば、相手に気づかれ
ずに近づける。目の前までやってきて不安げな顔をする彼女にゲンジは声をかけた。

「どうした、一緒にカネザカに行きたいのか？」

キリコは首を振った。

「行かない。ゲンジも行っちゃダメ」

「なんで？」

ゲンジは身をかがめ、両手を広げてキリコを招いてやる。

「らしくないぞ、ちびっこ忍者？」

「ゲーセンに行ったら、また怒られちゃうよ」

かまうものかと笑ってみせるゲンジ。しかしキリコは苛立ちをあらわに地団駄を踏んだ。

「ダメなの！ おじさんがゲンジのこと怒ると、みんなも怒られちゃうもん！」

ゲンジはまるで平手打ちを食らったように後ずさった。キリコもまた、本当に平手打ちをしたがっているかのような剣幕だ。思えば当然かもしれない。ハンゾーにいつも言われているのではないかと……「お前は自分のことしか考えていない」と。

兄が押しつけようとしてくる責任がいつも煩わしかった。そんなもの背負いたいわけがあるものか。兄と父の期待に応えることなどできはしない。二人のほうが期待のかけ方を変えるべきなのだ。ゲンジが島田宗二郎の息子という立場を自ら望んだことはないし、地位や金を守るために父が手を染めている稼業など考えたくもなかった。それを継ぐなど、もつてのほかだ。ゲンジはただ、あらゆるものから自由でいたかった。父は弱き息子をスパローと呼ぶが、スズメならばいつでもどこへでも飛び立っていける。だが、翼持たぬ身では――

ゲンジは溜息をついた。

「昨日は喧嘩するなって泣いて、今日はゲーセンに行くなって駄々をこねるのか？ キリコ、俺がどっか行っちゃって誰も気づきやしないよ。仮に見つかったって、自分でどうにかするさ。まあ……何が起らない限りはな」

ためらうような顔をするキリコ。しかし意を決して深呼吸し、目をぎゅっつつぶって一息に言った。

「ゲンジのお母さんはどうしたの？」

ゲンジは思わず目を瞬かせた。キリコは留美子と面識はないが、話を耳にすることはあった。ゲンジもハンゾーも、もちろん宗次郎もキリコに事情を話したことはない。それでも、島田留美子はシマダの家とカネザカにとっての“心”だった。彼女を慕う人々の口にその名が上がることは今も珍しくない。

「ああ……どこかに行っちゃったんだ。だいぶ前に」

「どうして？」

「どうしても、出ていくしかなかったんじゃないか」

母が家を去った時、ゲンジもまた怒り、戸惑った。しかし宗次郎とは違い、それを過去として乗り越え、母には母の理由があったのだと自分の中で納得した。いつか探しに行こうと思うことはあったし、あるいは自分が父親の支配から逃れれば、母のほうから見つけてくれるんじゃないかと思い巡らすこともあった。だが大抵は、母がどこかで幸せにいることだけを願っていたのだ。思い返せば、人目がなく一人でいる時の母はいつも暗い顔をしていた。

「家族はね、一緒にいたほうが強くなれるんだよ」

心配そうに言うキリコにゲンジは微笑んだ。彼女の家族ならそうなんだろう。朝、敏郎、それに地元の神社を切り盛りしているキリコの祖母……家族同士の絆は強く、互いを気遣い合っている。数年前の大きな傷によって引き裂かれるまでは、ゲンジの家族もそうだった。

「そういうのは家族によって違うんだよ。いいか、キリコ……いつか俺がいなくなっても、きっとキリコの元に帰ってくる。家ってのは場所じゃない。大切な人のいるところが家なんだからな」

手を差し伸べるゲンジ。

「大事な人がいれば、帰ろうって思うだろ？」

キリコは目をこすり、その手を取った。

シマダ城へと戻る間、キリコは興奮してずっと何かをしゃべっていたが、ゲンジはうわの空だった。先ほどのキリコの言葉と自分のこと……考え事で頭が一杯だったからだ。そして、気がついた時には異に足を踏み入れていた。

二人を囲む大勢のニンジャたち。

ゲンジは脇差を抜き、キリコに合図をしてそばに寄らせる。物怖じすることなくまっすぐ自分に見上げてくるあたり、この少女は本当に肝が据わっている。キリコを守るようにして周囲を見れば、黒装束のニンジャが八人——敵勢力の刺客だろうか。東京を主な縄張りとしているハシモト組がこんな所にまで手先を差し向けるとも思えない。だとすれば、シマダの血筋を絶つためにどこかが送り込んだ暗殺者か？ どうやって誰にも気づかれずに敷地内に入り込んだ？

ニンジャたちの囲いを割って、白の稽古着と黒の袴を着た女性が歩いてきた瞬間、ゲンジは理解した。これは身内だ。

「先生、まさかとは思いますが、……謀反ですか？」

尋ねるゲンジに朝は笑ってみせる。続いて現れたのは、険しい表情で仁王立ちするハソゾーだ。

「キリコ、囷ったな？」

「言われたことやっただけだもん！」

キリコが心外そうに抗議の声を上げる。ゲンジは師匠と兄に顔を向けた。

「それで、これは一体？」

「稽古場に顔を出そうとしないあなたのための出張鍛錬ですよ。私が考えたわけではありませんが、妙案だと思いましたので」

朝がうなずきかけると、ハンゾーが歩み寄ってゲンジの抜き身の刃に目をやった。

「今朝、どうして入ってこなかった」

「兄者が図ったのか？」

「父上の命だ」

「まあ、そうだろうな」

朝が手拍子を打った。

「さあ、敵に囲まれてしまいました。この窮地を脱するには、以前教えたように力を合わせなければなりません。お二人とも、決して倒れぬように。どうしても立ってられないようなら……せめて意識だけは手放しませぬよう」

そこまで言って娘の方を見る。

「キリコ、来なさい」

「やーだー！ 私も遊びたい！」

「もっと大きくなってからです」

ゲンジが刀を鞘に収めてキリコに差し出す。

「これを持っておいてくれるか」

キリコはにっこりと笑い、両腕を出した。刀を受け取ってふらふらと囲いを出ていく姿を見守りながら、ゲンジは「俺は影に潜む一本の刀なり」とつぶやいた。

娘とともに朝も囲いから下がる。そして弟子たちに向かって会釈をし、真っ直ぐに挙げた手を振り下ろした。

「はじめ！」

ニンジャたちが一斉に襲いかかる。

鍛錬不足のゲンジは、これほどの数を相手にすることに慣れていない。これまで組手の相手は一人かせいぜい二人、鍛錬はハンゾーと二人きりのことも多かった。

慣れていないのはハンゾーも似たようなものだが、向かってきた相手をそつなくさばいていく。攻撃をかわし、蹴り、殴る——いつも鍛錬で行っていることだ。

問題は、力を合わせて戦う必要があるということ。二人の動きは噛み合わず、誤って互いに互いを攻撃することさえある。これまで味わったことのない、天狗の鼻を叩き折るかのような試練。

「勝ち目なんてないぞ」

ゲンジが言った。敵の打撃が頭をかすめ、視界が揺らぐ。蹴り返したが外れた。

「だからといって音を上げることなどできん」

ハンゾーは忌々しげにそう返した。敵の回し蹴りをかわし、軸足を払って体勢を崩す。そこにゲンジが追撃をかけようとするが、腹に蹴りを食らってよろめき、ハンゾーにぶつかった。

「諦めるなんて言ってない。でも……！」

ハンゾーの顔にも焦りの色が浮かぶ。その次の瞬間、蹴り飛ばされて地面を転がった。雄叫びを上げて起き上がり、蹴ってきた相手に狙いを定めると、ゲンジを押しつけて攻めかかる。ゲンジもまた吠えながら敵に体当たりをかますが、倒れ込んだところに敵が群がり、窒息しそうなくらい強く押さえ込まれてしまう。

ハンゾーは弟を助けようとする——が、それが隙になった。眼前の敵に背を向けた結果、背後から飛びかかった一人にとりつかれ、もう一人に肩を押さえ込まれ、さらに別の者に片腕を封じられた。ニンジャは一人また一人と襲いかかり、ハンゾーは身動きを完全に封じられて膝をつく格好となった。

朝の合図でニンジャたちがどこかに姿を消すまで、ゲンジはろくに息もできなかった。荒い息を整えながらハンゾーを見ると、傷だらけの彼は苛立ちを隠さず、ゲンジにも朝にも視線を向けようとはしない。自分が率いるはずの者たちを相手に、これほど派手に負けてしまったのだ。時を置かず長老衆の耳にも届くだろう。

「敗北もまた勝利への道。とはいえ、龍の子らは並んで空へ舞い上がるもの。さもなくば……共に墜ちるしかありません」

落胆したように首を振る朝。

「お二人は力を合わせることを学ぶ必要があります。どちらか一方が鍛錬に来るだけではいけません。明日、空が白む前に道場にお越しなさい……お二人ともですよ」

ゲンジは肩を落としてうなずいた。鍛錬をさぼる余裕など、どこかに消えていた。

少なくとも、以前よりもさぼる頻度は下がるだろう。

痛む肩をさすりながら、もう少し加減してくれないものかと独りごちるゲンジ。

「先生ってなんであんなに厳しいんだ？」

「お前が軟弱すぎるからだ」

ゲンジは溜息をついた。

今の戦いで多少何かが変わった気もしたが、兄の方はまだこのやり取りを続けたいらしい。

「お前、去るつもりだったのか」

探るように言うハンゾー。ゲンジは起き上がりて服の汚れを払った。
「兄者と父上は、俺を俺じゃない何かにしたいんだろ。だったら、俺もどこかに消えた方がみんなのためなんじゃないか」

ハンゾーの目に苦悩の色が浮かんだ。その重さがどれほどのものなのか、ゲンジには知るよしもない。兄は父に似て鋼のような男だが、今の一言がその心をひどく揺らしたことだけは確かだ。

「お前はいつもいつも逃げてばかり。ゲンジはどこだ、弟はどこへ行ったと父上の勘気をこうむるのはいつも拙者だ。好き好んで弟の尻拭いをしてるとでも思うか？ 拙者がお前の面倒を見ているのは、お前なしでは——」

ハンゾーは言い淀み、ゆっくりと息を吸ってかすれた声を漏らした。
「お前がそばにいるなら、厳しい鍛錬にも耐えやすくなる」

大きな溜息を一つ吐き、ハンゾーは背を向けて歩き出す。ゲンジは兄が視界から消えるまでその背中を見ていた。

ハンゾーがゲンジのように責任を重荷と感じ、あまつさえ嫌悪しているなどとは考えたこともなかった。ゲンジが父の期待に応えられなかったとき、兄はいつも守ってくれていたのだ。家族は一緒にいたほうが強くなれる——キリコの言葉を思い出す。母が去って以来、自分が引き裂かれたと思っていた家族を、兄は必死につき止めようとしていた……。その痛切な事実をゲンジは今ようやく思い知ったのだ。

どうして自分はその重荷を分かち合おうとしなかったのか。兄者は一人ではないと言っただけでもよかったのに。

近くの茂みが揺れた。兄が戻ってきたのかと思って、ゲンジは茂みを見た。
そこには、背の高い草に置かれた自分の刀だけがあった。

その日の夕方、ゲンジはハンゾーの部屋へ向かった。そろそろ頭も冷えているだろうし、謝罪の言葉を聞いてくれるだろうと期待してのことだった。キリコも同じ考えだったようで、ハンゾーの部屋の前に先回りして、餅を山盛りにした盆を置いて待っていた。ゲンジを見たキリコは笑みを浮かべた。しかし、ゲンジが部屋の前に来ると、戸を叩いてすぐにどこかへ行ってしまった。

「こら、待て！」

少女は呼び止める声を無視して走り去り、廊下の奥の角を曲がって消えた。

予想だにしない不意打ちに固まるゲンジ。兄との会話に不安を覚えたゲンジが最

ゲンジはどこだ、弟はどこへ行ったと父上の勘気をこうむるのはいつも拙者だ。好き好んで弟の尻拭いをしてるとでも思うか？拙者がお前の面倒を見ているのは、お前なしでは——」

ハンゾーは言い淀み、ゆっくりと息を吸ってかすれた声を漏らした。「お前がそばにいるなら、厳しい鍛錬にも耐えやすくなる」

初に考えたのは、キリコのように逃げることだった。いや、あるいは聞こえていないかも——

「お前か」

戸が開き、顔を出したハンゾーが素っ気なく言った。

「あー、うん」

ゲンジはしゃがんで菓子盆を拾い、兄の方に差し出した。ハンゾーはためらうようにしながらそれを受け取る。

「何だ、これは？」

「謝ろうと思って来たんだ。けど、その餅は……俺たちを仲直りさせたい、ちびっこニンジャからのプレゼントだよ」

すると、ひょこっとキリコが顔を出し、不安そうに声をかけてくる。

「もうケンカしないで」

その目から涙を流し、鼻水をすすりながらも険しい顔を作ろうとする彼女。その表情は朝によく似ていた。

「どこにも行かないでよ、ゲンジ」

ここ数日抱えていた重圧が、ずしりとのおしかかってきたかのようだ。兄の目は今にも説教を始める気だと語っている。ゲンジは溜息をついた。

「心配しなくていい、どこにも行かないよ」

キリコを抱きしめてやるゲンジ。

「人はたまに心にもないことを言っちゃうものなんだ。それで、言うべきじゃなかったって後悔する」

ハンゾーの表情から険しさが取れる。ゲンジは続けた。

「兄者、今まで悪かった。これからは心を入れ替えるけど、俺は俺のやり方を変えるつもりはない。俺は俺以外の何かにはなれないし、父上の望みどおりに振る舞うのも無理だ。それでも、兄者の重荷を俺も背負う。家族をバラバラにしないために」

黙ったまま餅の盆を見下ろしているハンゾー。ややあって、ようやく口を開いた。
「この餅は、一人で食うには多すぎるな。だが、三人でなら……食いきれるだろう」
ハンゾーは戸を大きく開けて、二人を招き入れた。

今思えば、あからさまな待ち伏せだった。冷静に思い返せば明らかなのに、いつも後になって間違いに気がつくものだ。

周囲のアーケードマシンが放つ光と音のせいで、不意に現れた黄金面の男の攻撃を危うく食らいそうになる。チカチカと光る画面に照らされて、いくつもの鬼の面、銃、刀が部屋に浮かび上がる。ハシモト組の構成員たちが筐体の裏に潜んでいたようだ。

ゆっくりと周囲を確認するゲンジ。囲まれていた。意を決して刀を構えようとした次の瞬間、弦が鳴るようなかすかな音が聞こえたかと思うと、黄金面の肩に矢が突き立った。

矢を抜いて矢尻を見る男。そこに飛来した何本もの矢を受け、暗がりの中に倒れ込んだ。誰が矢を射たのか？ 考えるまでもない。

ぬうっとハンゾーが姿を現す。弓を背に掛け、かがみ込んでいたゲンジに手を差し伸べた。

ゲンジはためらった。兄と会うと、いつも必ず喧嘩になるのだ。そして、斬り合うよりも深い傷を拳と言葉で互いに負わせるはめになる。前に会ったときに負った体の傷はすでに消えていたが、その内側には決して消えることのない傷痕もある。

それでも二人は幾度となく再会した。隔てる距離が広がろうとも、二人の宿命はからみ合う。かつて父が語った物語の登場人物たちのように。

今のハンゾーは、一年前に会ったときのような苦悶に呻吟する男には見えなかった。ゲンジの記憶にある限り、兄がこれほど平穏な様子でいるのは初めてのことだ。

「兄者、ここで何を？」

「お前を助けているのだ。見ればわかるう」

つれなく答えたハンゾーの手を取ると、胸の奥がわずかに痛んだ。

「前に会った時、どちらの側につかを決めるとお前は言ったな」

「兄者……昔も今も、俺はいつだって兄者の味方だ」

ゲンジがハンゾーの背中に手を回す。驚いたことに、兄もまた抱き返してくれた。

本当に変わったんだな、とゲンジは思った。

体を離れたハンゾーが口を開く。

「助けてやったのに感謝の言葉もなしか」

(こういうところは変わってないな)

「来てくれて助かったよ。けど、まだ多勢に無勢だ」

「そうでもないよ」

背後から聞き覚えのある声があった。ゲンジに気取られずに後ろを取れる者などそうそういないが、一人だけ心当たりはある。

振り向くと、赤い狐の面を着けた女性が竜一文字を手立てに立っていた。

「おかえり、ゲンジ」

キリコはそう言うと、ゲンジに刀を手渡す。

「ずいぶん待たせてくれちゃって」

ゲンジは言葉を失った。キリコと再会したのは何年ぶりだろうか。もはや小さな子供ではないとはいえ、自分を見上げる位すらっぽい目はあの頃のままだ。すっかり驚いていると、キリコが御札を取り出して胸に貼り付けてきた。暖かな気が全身を巡り、怪我の痛みが消えていく。

ゲンジが二人を見る。長い時を経て、ようやくの三人の再会だ。この感情をどう言い表せばいいのかわからなかったが、心は軽い。まだ窮地ではあるものの、希望が感じられた。

ハシモト組の構成員たちが銃を構えて三人に攻勢をかけてくる。敵にも増援が加わっていた。灰色のタクティカル・アーマーを着た戦闘員たち――

タロンの兵だ。

ゲンジが求めていた問いの答えがそこにあった。ゲンジの目的は、タロン関与の確証をつかんでオーバーウォッチに報告すること。あとはここを生き延びて出ればいいだけだ。

飛び交う銃弾。刀で弾きながらゲンジがキリコに問いかける。

「タロンが手を貸してるにしても、限度ってもんがあるぞ。どう切り抜ける？」

「根性で」

キリコはそう言うと、クナイをきらめかせながら敵中に飛び込んだ。あまりにも素早く、そして静かに闇の中を動くせいで、敵の悲鳴と倒れる音が聞こえてこなければ、彼女の居場所はゲンジにもわからなかっただろう。

ゲンジとハンゾーは背中合わせに立った。息の合った連携で敵を攻撃し、身を守る――かつて重ねた鍛錬の成果だ。近づいてきた敵はゲンジの刃が斬り伏せ、遠くの敵はハンゾーの矢が射った。

敵に吞まれまいと懸命に戦うゲンジの目に汗がしみる。しかし敵の攻勢は留まるところを知らない。次第に刃の冴えは鈍り、嵐ノ弓から放たれる矢の数も減っていった。

ハシモト組とタロンの戦闘員たちが負傷した体を引きずって筐体の陰に隠れると、戦闘はようやく小休止に入った。

キリコが再びゲンジのかたわらにやってくる。だが、その足音が聞こえたことを考えると、彼女もまた限界なのだろう。面を外して額をぬぐっている。

「ここに押しこめられては、そう長くはもたん」

弓の手入れをしながらこぼすハンゾー。矢筒はもうほとんど空だ。矢の大半は逃げるハシモト組に刺さったまま失われていた。

キリコが片手でクナイを回して言った。

「外に出ないとね」

「俺が奴らの気をそらし、突破口を開く」

囃役を買って出たのはゲンジだ。

「ただ、ここに来た目的はオーバーウォッチのための情報収集だ。ハシモト組のアジトに潜り込んで、奴らの戦力をもっと探る必要がある」

「バカな真似はやせ。少なくとも単独でするようなことではない。奴らはシマダの残党に容赦せんぞ」

「それに、あいつらだけじゃないみたいだしね」

周囲で青いエネルギーの光がほとばしった。ハシモト組の新たな増援が到着したのだ。今度の連中は、タロンの戦闘装備を身につけた上で山神の刀を持っている。

「ハシモト組の奴ら、父をこき使ってくれちゃって」

「これほどの兵と装備をどうやって調達したのか」

疑問を口にするハンゾーにゲンジが答えた。

「タロンと手を組んだんだ……それか、手下になったか。その辺の詳しいことを今調べてる」

黄金の鬼面を着けた男がよろめきながら兵たちの前に立った。それを見たゲンジが続けて口を開く。

「あいつ、まだ立てるのか。兄者の腕もなまったな」

ハンゾーは低く唸り、苦々しげに矢をつがえた。

刀を抜いた黄金面に前進を命じられた戦闘員たちが、じりじりと三人を包囲する。

ゲンジは何も言わずにキリコとハンゾーに目をやり、この再会を導いた絆を思う。ゲンジが最も必要としている時に二人は来てくれた。だが、自分には東京でやらねばならないことがある。そのためにも二人の力は必要になるだろう。

「俺はこいつらの黒幕を突き止める必要がある。二人は逃げてくれ」

「ダメ!」キリコがすぐさま拒否する。

「やっと会えたのに、忘れたの? 一緒にいればもっと強くなれるって」

「忘れてなんかない。でも、二人は外にいてくれたほうが助かるんだ。これを持ってくれ」

ゲンジが小さな通信機をキリコに手渡す。

「そいつでオーバーウォッチと連絡がつく。奴らのアジトで仕事が済んだら、GPSで俺の居場所を追跡して直接迎えに来てもらうつもりだ。その時に二人には脱出の手助けをしてほしい」

「……カネザカには仲間がいる。必ずお前を助ける」

ハンゾーの肩に手を置くゲンジ。

「頼りにしてるよ、兄者」

ハンゾーはゲンジの手に自分の手を添えると、キリコに脱出の合図をした。彼女は納得のいかない顔だ。

「こういうやり方、好きじゃない」

「敗北もまた勝利への道さ」

ゲンジがささやいた。

「これはゲームじゃないんだからね」

「またな、ちびっこニンジャ」

ゲンジはそう言うと、キリコに背を向けてハシモト組の男と対峙した。

黄金面は兵を引きつけて距離を詰める。

刀を抜くゲンジ。構え、そして床を蹴った。瞬間、銃声とエネルギーの奔流が室内を満たす。ゲンジは目にも止まらぬ速さで敵を翻弄し、武器を斬り、黄金面の男へと迫る。

遠くで矢が風を切り、金属を鳴らす音がした。そしてついに、山神の鍛えた二振りの刃がぶつかり合った。

善戦したと言っていいだろう。少なくとも敵を引きつける役目は十分に果たしたはずだ。敵兵たちは、自分たちの隊長とオーバーウォッチのニンジャが繰り広げる死闘に見入っていた。まぶたに落ちる汗をまばたきで散らしながら素早く背後を見たゲンジの目には、敵に気づかれることなく脱出する二人が映った。

極度の疲労で震える四肢は、黄金面の攻撃を受け止めるので精一杯だ。やがて足がもつれ、膝をつく。それでも床に刀を突き立て、両手で柄を握って立ち上がろうとする。酸素が足りない。マスクが急にきつくなったように感じられる。

何本も伸びてきた手が乱暴に抑えつけてくる。刀を奪われ、後ろ手に両手を縛られた。

そして視界が黒に染まった。

それから数日、あるいはほんの数時間だろうか。ゲンジは快適とは言いがたい目覚め

「敗北もまた勝利への道さ」
ゲンジがささやいた。
「これはゲームじゃないんだからね」
「またな、ちびっこニンジャ」

を迎え、狭い独房から引きずり出された。目隠しをされたまま、長い廊下を通って明るい部屋に連れてこられる。照明のおかげで、目の前にいる人影の輪郭だけは見てとれた。自分を連れてきた例の大男が、机の向こう側の人物に向かってひざまずいている。ゲンジもまた力づくで膝をつかされた。

「何だ、そいつは？」

謎の人影が嫌悪を隠さず吐き捨てる。その声には機械的な響きがあった。

「刀と流派からして、シマダの残党と思われます」

金属が机を叩く音がした。

「へえ？」

人影が前のめりになったように見えた。

「面白い」

著者紹介

E. C. MYERS。『ニューヨーク・タイムズ』のベストセラー作家。デビュー作の『Fair Coin』でアンドレ・ノートン賞に輝く。著書に『SOS Thriller』シリーズや、『RWBY』のノベライズ版4作品、『Five Nights at Freddy's』シリーズのインタラクティブ・ノベルなどがある。最近の作品は『Gamers: Attempting Connection』、『Little Nightmares: The Lonely Ones』、『Kaiju Gaga (Choose Your Own Adventure Jr.)』など。